

曲直瀬道三『切紙』の原型と 内藤記念くすり博物館所蔵『家傳記』について

鈴木 達彦^{1,2,3)}, 平崎 能郎²⁾, 並木 隆雄²⁾

¹⁾ 帝京平成大学薬学部, ²⁾ 千葉大学大学院医学研究院和漢診療学, ³⁾ 北里大学東洋医学総合研究所医史学研究部

曲直瀬道三『切紙』は道三が門人に自らの医学を教示する際に授けた紙片「切紙」を、のちに整理して一書としたものである。遠藤次郎、中村輝子による白杵図書館所蔵『探頤集』についての先行研究によって、『切紙』は複数回にわたって編纂されたことが示されている。『当流医学之源委』によると、習熟の段階により40篇の「切紙」が授けられたことが確認できる(通行本の『切紙』は41篇)。これまでの「切紙」についての研究対象は、整理して一書としたものについてのものであったため、本研究では原型を保っているとみられる紙片の「切紙」について現伝する資料と成書との関係を検討し、また、『探頤集』のほか、もう1つの原『切紙』とみられる内藤記念くすり博物館所蔵『家傳記』について検討した。

紙片「切紙」については、東北大学付属図書館所蔵の19点(阿8-45(1)~(19)、武田科学振興財団杏雨書屋所蔵の14点(佐伯80、小2005、小2017-1~11、小2018)を対象とした。形態としては折りたたまれているものと卷子があった。現行の41篇のうち23篇が共通している。

通行本『切紙』には年紀が残されており、紙片「切紙」の年紀の多くは通行本と共通していたが、一部異なるものもあった。東北阿-85(2)(当世之両例、天文7年)、杏雨書屋小2017-2(建中、天文18年)、小2017-3(二十四剂、天文22年)、小2017-4(辟狐魅・辟驚風、永禄10年)、小2017-11(学習記、天文12年)となっており、通行本の元亀2年とは異なる。また、通行本には収載されない内容の「切紙」も4点確認される。

通行本『切紙』には諸処に「裏紙ニアリ」と記されていることから、「切紙」本体を裏む紙があったと窺われるが、東北大学所蔵の資料のうち7点は裏紙が残存しており、「切紙」の旧態を伝えるものとみなせる。通行本『切紙』には各篇の題名によく似た副題のようなものが付けられていることがある。現存する裏紙にも題が記されていることから、通行本において、主題と副題が異なっているものは、主題が裏紙の篇名で外題にあたり、副題が「切紙」に記された篇名で内題にあたるものであることが推察される。この点について、通行本の宗爽胃気篇と阿-85(1)を比較すると、通行本は主題が「宗爽胃気」となり、「胃気之口訣」と「宗爽胃絶之説」の項目となっているのに対して、(1)は裏紙の表題が「宗爽胃気」で裏紙の裏側に「胃気之口訣」が書かれ、「切紙」本体に「宗爽胃絶之説」が書かれている。紙片「切紙」が整理されるにあたって、裏紙と本文の題と記述が統合されたと推し量ることができる。

『家傳記』(内藤36468)は『探頤集』とは別の原『切紙』と考えられるもので、35篇からなる。そのうち5篇は通行本に類しない内容のものとなっている。年紀が記されているのは16篇であり、いずれも通行本の年紀とは異なっている。さらに、永禄2年に編纂されたと考えられる『探頤集』よりも古い年代である天文、弘治年間の年紀がみられる。通行本の「宗爽胃気」に該当する部分では、主題が「胃気」となり、「爽之胃絶之説」が弘治2年と記され、それに続いて「胃気之口訣」があり、通行本の順番とは入れ替わっていることから、裏紙に記載する内容の位置が異なっていることが確認できる。遠藤、中村の先行論文では『探頤集』を第1回目の『切紙』の編纂としているが『家傳記』はそれ以前に編纂が行われて成立したとみなすことができる。

紙片「切紙」と通行本の前段階の『家傳記』と『探頤集』と比較して注目されるのは、伝授する旧態を保っている紙片「切紙」に記される年紀が、原『切紙』の両書よりも後の年代の元亀2年のものが多いことである。このことは紙片「切紙」をまとめたのが成書の『切紙』であるとは必ずしもいうことができず、道三が編纂を繰り返しながら成書として手元に置いていたものから、紙片「切紙」を写して作成し伝授したということを示唆している。